戦国三武将のパーソナリティに関する精神分析的探究

── 原子価論の観点から ──

黒　崎　優　美*

A psychoanalytical inquiry into the personality of the three "Sengoku" generals

— A point of view from the valency theory —

Hiromi Kurosaki

要　旨

本稿の主な目的は、戦国時代を代表する武将である織田信長・豊臣秀吉・徳川家康のパーソナリティについて、原子価論の観点から考察を行うことである。「原子価」(valency) は、Bion,W (1961) により精神分析学に導入されHafsi,M (2006) によってパーソナリティ論へと発展した概念であり、対象間の繋がり方の類型、すなわち、「依存」(dependency)、「闘争」(fight)、「つがい」(pairing)、そして「逃避」(flight) を規定する。戦国三武将の個性を際立たせるホトトギス考をはじめ、主立った史実や歴史上のエピソードなどを素材として用いることにより検討を行った結果、信長には闘争、秀吉にはつがい、そして家康には依存の原子価を特徴づける内容が多くみられた。このことから、三者はそれぞれ異なる原子価をもち、それが仕事のやり方や対人関係のあり方に大きな影響を与え、さらにその生涯を終えてからも、後の人々によってそれぞれの原子価特性を強化するような史実の解釈や新たな歴史的エピソードの追加がなされながら現在に至っていることが明らかとなった。最後に、リーダーシップ論からみた三者の原子価について、さらに逃避原子価に相当するホトトギス考についても言及した。

キーワード：戦国三武将、パーソナリティ、原子価、Bion
the three "Sengoku" generals, personality, valency, Bion

はじめに

歴史を学ぶことの最大の意義は、歴史に学ぶことにある。すなわち、歴史とは人類の経験の蓄積であり、それらの「経験から学ぶこと」(learning from experience) (Bion, 1977) により、我々が生きている現代社会の理解や成長・発展が進むことにこそ、歴史を学ぶ意義がある。このことは、異なる時代背景や社会的状況のなかに見出せる共通点があるということを含んでいる。

さて、日本史上において最もよく取り上げられる人物として、戦国時代に活躍した織田信長、

平成20年9月26日受理　*しぎさんメンタルクリニック学園前

豊臣秀吉、徳川家康の三大武将が挙げられる。三者の際立った個性は、「大半の日本人を三分しうる」（加来, 1996; p. 3）と言われるほどプロトタイプの一種として現代まで生き続けており、三者を対象とする比較論的言及は、歴史学に留まらず、リーダーシップ論や経営者論などの社会学的分野（童門, 1997、加来, 2006他）や、パーソナリティ論などの心理学的分野（小此木, 1997他）など広範に及ぶ。特に、それらの原点ともいえる以下の狂句[1]は、江戸時代に記されてから現代に至るまで、三者の個性をよく表すものとして巷間に広く伝えられ、またよく引用されるものである。

鳴かぬなら　殺してしまえ　　ほととぎす　（織田信長）
鳴かぬなら　鳴かせてみせよう　ほととぎす　（豊臣秀吉）
鳴かぬなら　鳴くまで待とう　　ほととぎす　（徳川家康）

いわゆる「ホトトギス考」として知られるこれらの句については、さまざまな立場からの解釈が可能でありまた行われているが、これを対象関係論の立場からみた場合、三者のパーソナリティにおける「ほととぎす」という象徴的な対象との関係のあり方、あるいはBion（1961）のいう「原子価」（valency）を反映していると考えられる。そこで本稿では、Bionにより精神分析学に導入されHafsi（2006）によってパーソナリティ論へと発展した原子価論の観点から三者のパーソナリティについて考察を行い、その比較論的研究に新たな側面から光を当ててみたい。

Ⅰ　戦国三武将の仕事と生涯

信長・秀吉・家康の三武将が行った仕事やその生涯にまつわるエピソードは枚挙に暇がないが、ここでそれらをすべて網羅することは不可能であり、かつ本稿の目的を遙かに越えている。また、それらのなかには史実としての信憑性や歴史的背景などについて解釈の分かれるものもあるが、本稿が焦点を当てようとしているのは、対象関係のなかに位置づけられる三者のパーソナリティ、すなわち周囲の評価や期待により変えられたり造られたりする「役割パーソナリティ」（小此木, 1997）を含むそれである。従って、本稿で扱う素材の一部が後の人々によって何らかの脚色を加えられたものであるとしても、それらもまた彼らに与えられてきた役割パーソナリティの一部として区分することなく採用し、ここではホトトギス考にみられる三者の特性と関連のある素材を中心に、その仕事と生涯を振り返る。

1）織田信長（1534～1582）

天文3（1534）年、尾張（愛知県）の大名織田信秀の子として生まれた信長は、若い頃から武士に似合わぬ「ヒッピーまがいの異様な風体を好み」（白石, 1988; p. 85）、人目も憚らず町中へ出て平民の子どもと一緒になって遊んでいるような変わり者であった。このような信長の振舞いに周囲からは「うつけ者」（愚か者）と嘲かれ、家臣や一族からも疎まれる存在であった。

天文20（1551）年、父信秀の死に伴い家督を相続した信長は、「兵農分離」[2]や長槍・鉄砲の

導入など革新的な戦備・戦術によって急激に領土を拡大し、永禄2（1559）年に尾張を統一、同10（1567）年には美濃（岐阜県）の統合を果たした。この際、家督を争った弟信勝や、尾張統一の拠点となった清洲城城主であった織田信友など、同族殺害も躊躇なく行った。また、家臣の登用は、武家社会の伝統的世襲制を無視した完全能力主義で、有能な人材は出自に関わらず採用し重要な役職を与える一方、無能な人材は家老であろうと譜代の重臣であろうと構わずに処断した。

図1．「天下布武」の印章（NHK取材班編, 1996）

美濃統合の翌永禄11（1568）年、「天下布武」[3]（図1．を参照）を掲げ上洛した信長の勢いは留まらなかった。朝倉義景攻めでは、妹婿浅井長政の裏切りにより撤退を余儀なくされたが、すぐさま体制を立て直し、徳川家康軍と共に姉川にて朝倉・浅井連軍を下し、両家を滅亡に追い込んだ。さらに、中立の要請を受け入れなかった比叡山延暦寺に対してはこれを焼き討ちにし、僧侶だけでなく寺に逃げ込んだ民衆を含め3千余名を虐殺した。天正元（1573）年に室町倒幕を果たすと、信長は開幕に必要な官位をすべて返上し、朝廷に追随することなく天下統一を目指してさらに戦いを続けた。信長包囲網と言われ苦戦を強いられていた各地での一向一揆制圧を本格化し、伊勢長島では「根切り」と呼ばれる無差別大量殺戮により2万人を焼き殺した。また、武田軍を新戦法「鉄砲の三段撃ち」により下し、一度は海戦で大敗した毛利軍に対しては、火矢・鉄砲・焙烙という毛利水軍得意の戦法をすべて封じ込めるため、鉄板を張り巡らせた上大砲を装備した「鉄甲船」を投入しこれを打ち破った。信長の常識にとらわれない発想は政策の面にも発揮されており、代表的なものとしては規制緩和による自由取引市場「楽市楽座」[4]の創設が挙げられる。これにより市場は大いに活性化し、貨幣経済の発展がもたらされた。天正6（1578）年、琵琶湖を見下ろす五層七重の天主閣をもつ安土城を完成させると、同9（1581）年には大規模な「馬揃え」（軍事演習）を行い自らの武威を示し、天下人への道を着実に歩んでいた信長であったが、翌天正10（1582）年、重臣明智光秀の謀叛により京都本能寺にて横死、49歳の生涯を閉じた。独自の国家観とそれに基づく徹底した合理主義、卓越した決断力と行動力によって短期間に戦国の世を下剋上の精神で上り詰めた信長は、その副作用ともいうべき家臣の謀反によってその命を終えたのである。

2）豊臣秀吉（1537～1598）

豊臣秀吉は、天文6（1537）年尾張に生まれた。父木下弥右衛門の職は、織田家の足軽とも百姓とも言われるが、何れにしても秀吉が武家の出自でなかったことは確かなようである。7歳で父を亡くした秀吉は、母の再婚相手と折り合いが悪く、15歳で家を出ると、針商いをしながら諸国を流浪した。

天文23（1554）年、18歳になった秀吉は、清洲城城主であった織田信長に、雑用に従事する小物として仕え始めた。秀吉の主君信長への献身振りは、寒空の下懐中で信長の草履を暖めながら待っていた、あるいは信長に「猿」の綽名で呼ばれると一層顔を猿に似せて見せたといった逸話

に残されている。また、美濃攻略に際しては、伝手を頼りに情報を収集し「織田方随一の“美濃通”となり」（加来, 1996; p. 84）り、敵地墨俣への築城という他の武将が悉く失敗した至難事を成し遂げた。[5] さらに西美濃三人衆（安藤守就、氏家ト全、稲葉一鉄）といわれた強豪を説得し織田側へ誘降させることに成功するなど活躍し、出自にこだわらない信長の人材登用により異例のスピード出世を果たした秀吉は、天正2（1574）年には今浜に自らの領地を与えられるまでになった。秀吉は信長の恩に報いるべく、この地名を信長の一字を用いて長浜と改めた。

天正10（1582）年、明智光秀の謀反による信長の死を知った秀吉は、直ちに光秀を討ち、信長の葬礼を盛大に行うことによって自身が実質的後継者であることを内外に知らしめた（原田, 1982）。翌年に築城を開始した大坂城は、総面積100万坪以上、五重の屋根を持つ壮大な天守閣を備え、黒漆喰の壁面にふんだんに使われた黄金の装飾が一段と際立ち、場内には「黄金の茶室」なども設置された豪華なものであった（図２．を参照）。さらに天正13（1585）年、49歳で関白に叙任した秀吉は、政庁のため京都に聚楽第を建設したが、こちらも銘木・名石を広く集めて造られ、大坂城をしのぐ「黄金の城」といわれた。秀吉は、これらへ積極的に人を招いては自ら城内を案内してまわった。また、服装も派手好みであった秀吉は、特に南蛮渡来の洋装を好み、茶会の参加者全員に南蛮服着用を命じたり、仮装で花見を行うなど「華やかなイベントを・・開いて盛り上げるのに非常に長け」ていた（NHK取材班編, 1998; p. 174）。家臣に対しても、手柄に応じて領地や金銀を惜しみなく与えたことで知られ、天正17（1589）年に聚楽第門前において35万５千両もの大金をばらまいた「金くばり」は特に有名である。

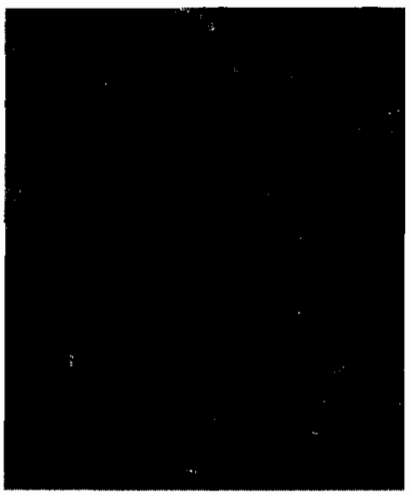

図２．大坂城（大坂夏の陣図屏風、部分）（NHK取材班編, 1997）

天下統一総仕上げの北条攻めでは、敵の本拠地である小田原城のほど近くに、関東にはまだなかった最新技術で総石垣の城を短期間で秘密裏に完成させ、墨俣城に次ぐ一夜城の出現により敵の度肝を抜いた。北条側はこれにより戦意を喪失、降伏し、天正18（1590）年、秀吉は54歳で遂に統一国家を実現し、約120年に渡る戦乱の世に終止符が打たれた。

しかし、その後の秀吉は、２度の朝鮮出兵失敗や、その憂さを晴らすべく建立した伏見城などにより国費を消耗し、57歳で漸く授かった嫡男秀頼[6] の行く末を案じながら、慶長３（1598）年、伏見城にて62歳の生涯を閉じた。

３）徳川家康（1542～1616）

天文11（1542）年、三河岡崎城城主松平広忠の長男として誕生した徳川家康は、６歳から２年間を織田家、さらにその後の11年間を駿府の今川家で人質として過ごした。その後今川家に仕えるも、永禄３（1560）年、今川軍は桶狭間で信長軍に大敗、主君義元は戦死した。自害も考えた家康であったが、大樹寺住職登誉上人の言葉「厭離穢土　欣求浄土」[7] に思い留まり、以後、戦

国の世を終わらせ平和を実現するという意志を表すため旗印としてこの文言を用いた。今川家の敗北により、家康は、父祖以来の本拠地であった岡崎城を今川家から取り戻したが、その際「今川どのの、ご承認をいただいておりませぬ」（加来, 1996; p. 211）と今川兵がすべて退却するのを待ち、「捨て城・・ゆえ、拾ったとて差し支えあるまじ」と漸く入城したという。

こうして独立を果たした20歳の家康は、永禄５（1562）年、信長と軍事同盟（清洲同盟）を結んだ。本同盟関係は、信長が亡くなるまで20年間も続いたが、それには、信長の命で妻と息子を殺害しなければならなかったことなど、家康の方が「幾度も煮え湯を飲まされながら、ついに一度も信長を裏切らず・・同盟者に徹した」（加来, 1996; p. 36）という背景があった。元亀３（1572）年、武田信玄との領地を巡る争い（三方ヶ原の合戦）に敗れ、這々の体で浜松城へ逃げ帰った家康は、慢心への自戒のため、恐怖に震える自身の姿を描かせた（図３．を参照）。

図３．しかみ像（部分）
（NHK取材班編, 1998）

信長亡き後、一旦は織田信雄に付き秀吉と対立した家康であったが、講和後は秀吉に仕え、その後は信長との同盟関係同様、「秀吉の存命中はひたすら守勢を保ち、次の天下を狙ういかなる動きもなしていない」（加来, 1996; p. 131）。

秀吉の死後、慶長５（1600）年、関ヶ原で石田三成に勝利した家康は、同８（1603）年、朝廷より征夷大将軍を任ぜられ江戸に幕府を開き、61歳にして天下人となった。２年後には家督と将軍職を三男秀忠に譲り世襲制による幕府と徳川家の安泰を世に知らしめると、自身は駿府城に隠居し、実質的な権力者として徳川幕府の基礎固めを行った。[8] 代表的な政策としては、元和元（1615）年に制定された「武家諸法度（ぶけしょはっと）」、および「禁中并公家諸法度（きんちゅうならびにくげしょはっと）」が挙げられる。前者は、諸大名統制のためその理想像（文武・倹約の奨励、遊楽の禁止など）を明示し、かつその権力拡大を抑制する事項（居城の修補・新造の禁止、無断婚姻の禁止など）を定めたもので、違反者には罰則が科せられた。後者は、幕府による朝廷の統制という両者の関係を明確にするもので、天皇、および公家に対する規定を含む初の成文法であった。両法令によって、下剋上による戦国時代から法令制度に基づく封建社会への転換が完成し、以後250年以上に渡って続くことになる江戸幕府の基礎固めが成されたといえる。なお、家康は生涯で正室２人、側室19人との間に19人の子をもうけたが、側室のうち５名は出産経験のある女性を選ぶなど、世襲を支える多くの子孫を残すことを考えていたようである（篠田, 2005）。

晩年まで質素倹約の生活と健康に留意した粗食を徹底し、徳川家と江戸幕府の繁栄の道筋をつくった家康は、元和２（1616）年、当時としては大往生といえる75歳でその生涯を閉じた。下記は家康の遺訓として広く知られているものである。「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くがごとし　いそぐべからず、不自由を常と思えば不足なし、こころに望みおこらば困窮したる時を思い出すべし、堪忍は無事長久の基、いかりは敵とおもえ、勝つ事ばかり知りて、まくること知ら

ざれば害その身にいたる。おのれを責めて人をせむるな、及ばざるは過ぎたるよりまされり」。

Ⅱ　原子価とその類型

文字通り、人間は人の「間」（木村, 1988）に存在するものであり、人が生きていく上で、他者の存在、あるいは対人関係は不可欠の要素である。

精神分析家であるBion（1961）は、原子が他の原子と結びつくように、人間もまた他者と結びつく傾向をもっていると考え、その無意識的・本能的な「即座に他の人と結合する能力」(p. 169)を「原子価」(valency: 以下、V）と名づけた。しかし、Bion自身によるVへの言及は少なく、曖昧なまま残された部分が大きい。Hafsi（2006他）は、Bionが残した原子価論における穴を埋めるべく、Vの類型、発生論、そしてマイナスVという新たな概念を提示している。ここでは、本稿と関係の深い原子価の類型についてのみ言及することとする。

Vの類型についてBion（1961）自身は述べていないが、「基底的想定グループ」(basic assumption group）と同様、「依存」、「闘争・逃避」、そして「つがい」の３つの類型が存在することを示唆している。Hafsi（2006）はStock&Thelen（1958）にならい、「闘争」と「逃避」を異なるVとして扱い、各Vの特徴を以下のとおり明確化した。

１）依存原子価

「依存原子価」(dependency valency: 以下、DV）の人は、「縦的な対人関係によって特徴づけられる」(Hafsi, 2008; p. 93, 筆者訳)。DVの人は自己評価が低く、そのため自力で何かを成し遂げられるとは考えない。それには、強さや健康、あるいは知性などが不充分だと信じているのである。そこで、DVの人は、孤独を恐れ、常に助け、教え、導き、責任を負ってくれるような、信頼に足る特別な存在を求めている。また、その相手から、愛情、支持、承認、賞賛などを得ようとする。さらに、DVの人は人を信じ易く、また他者を過剰評価する傾向がある。言い換えれば、DVの人は、人間とは基本的に信頼できるものであり、またそれに足る価値をもっていると考えている。一方で、DVの人の対人関係には、利他主義的、自己犠牲的な側面もみられる。これは、自身がもっている愛情や賞賛などの要求を、「同一化に基づく共感」(同p. 93, 著者訳）によって他者の内に認め、それらの要求に応えようとする傾向を表している。つまり、DVの人は、自身と同様他者における援助の要求を敏感に察知し、時にはそのような存在をつくり出し、援助やサポートをすることによって、頼る側だけでなく頼られる側として相手との間に縦的な関係を築き、そのなかで愛情や賞賛等の要求を満たそうとするのである。

２）闘争原子価

「闘争原子価」(fight valency: 以下、FV）の人は、「対決的な対人関係により特徴づけられる」(Hafsi, 2008; p. 117, 筆者訳)。FVの人は、不信感を抱きやすく競争意識が強いため、すべての人を敵、あるいは競争相手として認識する傾向がある。そして、相手に対する敵意や攻撃性を、批判や自己主張によって率直に表明しようとする。従って、FVの人の第一印象は、遠慮がなくず

けずけとものを言うような感じである。さらに、FVの人は、自己評価が高く自信のあるような印象を周囲に与え、実際に自他に対して厳しいところがある。弱さや恐れを見せることをよしとせず、それに打ち勝とうとする。行動力や決断力に優れている反面、自己中心的で自他の弱さや敗北を受け入れにくい。グループにおけるFVのリーダーシップは、グループのおかれている精神的状態により異なるが、「作動グループ」(work group)(Bion, 1961)の下で機能しているグループの場合、目的への到達やグループの成長・発達に貢献することができる。しかし、グループが「闘争・逃避基底的想定」(basic assumption of fight/flight)の影響下にある場合、グループにおける原始的不安を顕在化させ、幻想的な内外の敵と戦うようになり、そのための結束が最優先されるようになる。

3）つがい原子価

「つがい原子価」(pairing valency: 以下、PV)の人は、「暖かく親密な対人関係を求め築こうとする傾向が強い」(Hafsi, 2006; p. 95, 筆者訳)。PVの人は、常に相手の個人的な生活や出来事に興味を抱き、そのような情報や秘密を共有することによって、より親密で個人的なレベルで相手と付き合うことを好む。性的関係がPVの対人関係のモデルであり、従って、PVの人の対人関係には、しばしば性的な魅力や誘惑が含まれる。PVの人の印象は、明るく陽気で、親しみ易く、打ち解けた振る舞いで周囲を楽しませるようなタイプである。また、PVの人は、楽観主義的な考え方で、失敗しても希望を失わず、いずれすべてはうまくいくと考える傾向が強い。PVの人は、親密な関係を求めるが故に、形式張った大規模な集団よりも、小規模な集団への所属や活動を好む。また、「人類皆兄弟」といったスローガンにみられるような、民主主義的、平和主義的な傾向が強く、この信念に一致するよう活動する。従って、PVの人にみられるリーダーシップは、民主主義的なタイプのものであり、正義や自由、平等に重きを置き、それらを阻害するものに対しては嫌悪する傾向がみられる。

4）逃避原子価

「逃避原子価」(flight valency: 以下、FlV)の人の対人関係は、「葛藤回避傾向」(Hafsi, 2006; p. 94, 筆者訳)により特徴づけられる。FlVの人にとって、葛藤状況は、対人関係を危険に晒すようなものであり、従って可能な限りそのような状況を避けようとする。従って、一見矛盾しているようであるが、FlVの人は、感情的・物理的な距離を他者との間におくことによって対人関係を保とうとする。彼らは、愛情、憎悪や協力的関係にさえ、深く介入しようとしない。なぜなら、深い感情的関わり合いが招く葛藤と、それに伴う関係の破壊を恐れるからである。そのため、FlVの人は、対人関係において、互いのプライバシーを尊重する傾向が強い。また、FlVの人は、明確な自己主張や助言、リーダーシップをとることなどを控える傾向がある。FlVの人にとって「出る杭は打たれる」は真実であり、従って、FVの人と異なり他者の上に立つことを好まず、またDVの人と異なり、他者に頼ることを好まない。FlVの人にとってより重要なことは、自己充足であり、FlVの人が独立した印象を与えるのはそのためである。

Ⅲ　原子価論からみた三武将

ここまで述べてきた内容から、筆者は、三武将のVについて、信長の場合にはFV、秀吉の場合はPV、そして家康の場合はDVに相当するであろうとの仮説を提示する。ここでは、三者の仕事と生涯にまつわる史実や歴史的エピソードを素材として用いることにより本仮説について検討を行う。

１）織田信長ー闘争原子価

ホトトギス考において、鳴かないほととぎすは殺してしまうと例えられている信長であるが、これは、FVに特徴づけられるパーソナリティ特性、あるいはそれに基づく対象関係を象徴していると考えられる。以下、具体的なFVの特徴を挙げながら整理してみよう。

・敵（批判）意識、攻撃性

FVの人にみられる最大の特徴は、敵意や攻撃性によって対象と繋がろうとするところにあるが、信長の場合、「この世の、一見、常識に見える現象や習慣を生涯疑いつづけ」（加来, 1996; p. 74）、保守派や反対勢力と戦いながらそれらを悉く破壊していった「こわし屋」（白石, 1988）ともいわれる側面がこれに相当すると考えられる。その片鱗は、うつけ者との評を意に介することもなく、武士の子に似合わぬ風変わりな身なりで身分の異なる平民の子と遊んでいた幼少期から既に顕在であり、成長し家督を相続してからも生涯を通してこの基本的な姿勢は変わることがなかった。「天下布武」の印章に象徴されるように、200年以上続いた室町幕府や朝廷ですら、信長の目指す武家支配国家から見ればそれを阻もうとする敵でしかなかった。朝廷から征夷大将軍という官位を頂戴し幕府を開くという当時の常識的な統治のあり方を疑い批判的であったからこそ、信長は、官位返還の上室町幕府を倒し、自身の目指す天下統一の道を貫いたのであろう。家臣の登用においても、信長は、当時の常識であった身分や出自によって登用の有無や報酬の程度を定めることをせず、またそれらによって無条件に相手を信用することもなかった。そして、主君や軍にどれだけ貢献し戦果を挙げたかを基準とする完全能力主義を採用したのである。親族や身内も例外ではなく、自らの進もうとする道を阻む者は容赦なく切り捨てた。家督を争った弟信行、清洲城城主であった織田信友、妹婿の浅井長政、さらに同盟を結んだ家康の妻や子どもなどがこれに当たる。

このように、信長のFVに基づく批判精神と攻撃性によって中世的な古い価値観や制度が破壊され新しい時代の空気が呼び込まれた。しかし、改革に対して保守勢力が足を引っ張るのは世の常であり、改革者は常に逆風に苛まれるものである。信長の生涯は常に反対勢力との戦いと共にあったといっても過言ではなく、その基底にある不信感は時に「裏切りを誘い出したりしてしまう」（小此木, 1997; p. 223）こともあっただろう。明智光秀の謀反を知り「やむなし」と応えた信長にとって、常に敵を意識し、さらに自ら敵を作り出してはそれらと戦い続けることこそが彼の生を意味づけることであり、そういう意味では、志半ばでの呆気ない最後もまさに彼が言うとおり必然的なものであったといえるのかも知れない。

・高い自己評価、決断・実行力

上述したように、信長は、単に既存の価値観や制度を破壊しただけでなく、近代的な自由主義による社会の構築を目指した「改革児」（白石, 1988）であり、「破壊と創造をかねあわせているシヴァ神」（原田, 1982; p. 95）のような存在でもあった。信長が保守派の抵抗に屈することなく改革を推し進めていくことができたのは、周囲の評価を気にしたり忠告を安易に受け入れたりしない「独断専行」（篠田, 2005; p.45）によるところが大きいといわれるが、このことは、FVの特徴である自己評価の高さと、それに基づく決断・実行力の強さに相当すると考えられる。家臣登用の仕方一つとっても、当時の常識では考えられなかった信長の能力主義的なやり方は、秀吉のように貧しい出自から異例の出世を果たす成功者を生む一方で、古くから織田家に仕える者などにとって不満を抱かせるものでもあったに違いない。自由競争主義に基づく経済政策であった「楽市楽座」にも同じことがいえる。自由な経済活動は新たな成功者を生み市場全体を活性化させる一方で、既得権益を享受していた特権商人のなかにはこれを面白く思わない者も多くいたはずである。しかし、一部の者の不満にいちいち耳を貸していたのでは、これらの大胆な改革を次々と断行することは難しかったであろう。自身の考えに絶対的な自信があったからこそ、信長は大胆な決断をし、またそれに家臣たちを従わせることもできたと考えられる。

・強さ、厳しさの強調

信長の行った改革のなかには、新しい戦法や戦術も数多くあるが、そこには勝つこと、すなわちFVの特徴である強さへのこだわりがみてとれる。「兵農分離」による常備軍の確立や、長槍・鉄砲といった新たな武器の導入、鉄砲の三段撃ちなどの新戦術がこれにあたる。また、威厳を示すために荘厳なつくりで築城された安土城や、大規模な軍事演習を行っていることなども、内外に自身の強さを知らしめようとするFVの特性に相当するものである。さらに、負戦を喫した後の信長の動きをみると、朝倉攻めの際の撤退後には家康の援軍による体制建て直し、また海戦で大敗した毛利軍に対しては鉄甲船を用いた新たな戦術によって反撃と勝利を収めており、強さにこだわる負けず嫌いの一面がさらに強調されている。

次に、同じくFVの特徴である厳しさは、前述した家臣の登用や経済政策における自由競争の奨励に加え、反対勢力への徹底的な弾圧に象徴されていると考えられる。比叡山延暦寺での一般人を含む3千人余の大虐殺や、伊勢長島における一向一揆制圧のための「根切り」などがこれに相当する。もしかしたら、信長は常に「やるかやられるか」という究極的な状況を自ら作り出し、やられるかも知れないという恐れをとことんやることによって乗り越えようとしていたのかも知れない。

ここまで述べてきたことをホトトギス考に当てはめてみるならば、信長にとって鳴かないほととぎすとは、能力のない弱いものや信長の意に背くものであり、それが既存の価値観や常識的な考え方からみてどれだけ価値のあるものであろうと、それらを常に疑い、自分自身の信念以外に信じるものをもたない信長にとっては、不要であり、また徹底的に破壊すべきものでしかなかったと説明することができる。ほととぎすそのものもまた、信長にとっては既存の価値観に支配された対象でしかないといえるだろう。

2）秀吉

秀吉は、ホトトギス考において、鳴かないほととぎすを鳴かせることができると例えられている。これは秀吉のPVに特徴づけられるパーソナリティ特性、あるいはそれに基づく対象関係を象徴していると考えられる。以下、具体的なPVの特徴を挙げながら整理してみよう。

・関係の性愛化

PVの人における最大の特徴は、関係の性愛化、すなわち、対象のなかにまで入り込むことによって相手と密接な繋がりを持とうとするところにある。より具体的にいえば、PVの人は、好奇心旺盛で、相手の個人的な情報や秘密を聞き出したりそれらを共有することを望む。秀吉の場合、性愛的関係そのものに執着する女好きとしても知られるが、それ以上に「人たらし」と称される所以である、気配り・根回しにより相手の「懐に入り込む」心中掌握の巧みさがこれに相当する。信長に仕えていた時代には、主君の草履を暖めた逸話に代表される献身振りや、自らを猿に似せおどけてみせる機嫌取りの巧みさによって、気難し屋と言われた信長の気に入られ、家臣のなかでも出世頭となり、自らの領地を与えられた際にもその地名に信長の一字を用いるという奉公心の表明を忘れなかった。また、戦においては情報戦に長け、墨俣一夜城の築城や西美濃三人衆の説得・誘降により手柄を立てた秀吉であったが、それを可能にしたのもまた、敵陣という対象のなかに入り込みその特性を把握したり、さらには手懐けるというPVの特性に基づくパーソナリティ特性によるものであったと考えられる。

・親近感

PVの人は温かく親密な関係を求めるので、相手のことを知りたがるだけでなく自己開示も進んで行い、陽気で親しみやすいという印象を与える。秀吉の場合、家臣との関係や、来客への対応などに本特性がよく表れている。家臣に対して秀吉は、自他に対して厳しさを求め競争を重視した「信長の厳罰主義を反面教師とし、恩賞重視の政略を」（加来, 1991; p. 138）とったが、そこには単に報酬を与えるということだけではなく、苦労を労う言葉をかけることや、現場に出向き家臣たちの本音を聞き出すことなども含まれており、家臣たちからみれば非常に近く親しみやすい存在として感じられたはずである。次に、来客に対しても人任せにするのでなく、自ら出迎えもてなすのを好んだ秀吉であったが、その際には相手の話に「百面相のごとく己の表情を変え、驚嘆し、感激して」（加来, 1996; p.159）見せるのが常であったという。これもまた、来客の方からすれば、緊張が解れ、秀吉に対して話しやすく親しみやすい印象を抱いたであろうと考えられる。秀吉が好んで着用したといわれる南蛮服が、当時家臣や一般の人々の間にまで大流行したといわれるが、そのことからも、秀吉が周囲の者から好感を持たれ、また身近な親しみやすい存在として感じられていたことがわかる。さらにいえば、江戸時代後期に秀吉ブームといえる時期があった[9]ことや、現代でも「今太閤」[10]という言葉が用いられていることは、それだけ秀吉が人々の身近に感じられる武将として存在し続けていることを象徴しているといえる。

・演出力

PVの人は、親しみやすいというだけでなく、相手を楽しませるための演出力に長けている。秀吉もまた、一流のエンターテイナーとしての特質を備えていたと考えられる数々のエピソードが残されている。まず、大坂城と聚楽第に代表される豪華絢爛な建造物がこれに相当する。秀吉

は城に「防御以外の重要な付加価値」(NHK取材班編, 1996; p. 31) を与え、「戦う城から見せる城」(NHK取材班編, 1997; p. 167) への価値転換を行ったといわれるが、ふんだんに用いた金の輝きを黒の漆喰によって際立たせたデザインや、自ら喜んで客に城を案内していたことからも、確かに秀吉が人の目を楽しませることにこだわっていたことがうかがわれる。信長の死後直ちに謀反をはたらいた明智光秀を討ち信長の百箇日法要を盛大に行ったことも、秀吉がどこまで意識的に行っていたかは別として、他に先んじ自らが信長の後継者であることを内外に大々的にアピールするための演出効果は大であった。さらに、墨俣城・石垣山に代表される一夜城の逸話は、江戸後期の創作であるという説もあるが、何れにしても、一流の演出家としての秀吉の特性やイメージを象徴するものである。秀吉の恩賞人事については先に述べたとおりであるが、その一環として城門前で行われた「金くばり」や、家臣に仮装を命じて開かれた花見や茶会などもまた、秀吉が家臣や沿道の民衆を楽しませ、自らもそれに加わり楽しむことのできる親しみやすさと演出力を表しているといえる。

ホトトギス考に戻って考えてみると、秀吉にとって、ほととぎすの鳴き声は自らを天下人へと導く呼び声であった。貧しい出自故、大人しく待っていたのではいつまでも順番がまわってこないと悟っていた秀吉は、PVに特徴づけられる人心収攬の能力を遺憾なく発揮し、自ら積極的にはたらきかけることにより天下統一を成し遂げたのである。

3）家康

ホトトギス考によれば、家康は鳴かないほととぎすを鳴くまで待つような人物であるという。これは家康のDVに特徴づけられるパーソナリティ特性、あるいはそれに基づく対象関係を象徴していると考えられる。以下、具体的なDVの特徴を挙げながら整理してみよう。

・縦的関係

DVの人の対人関係における最大の特徴は、頼る・頼られるという縦的な繋がりを築く傾向の強さにあるが、家康が幕府を開くまでの半生は、正にこの縦的な関係によって成り立っていたといえる。幼少期の長期に渡る人質生活から始まり、今川義元・信長・秀吉と相次いで仕えていた間、秀吉のように家出することもなく、信長のように下剋上の道を邁進することもなく、与えられた役割を受け入れ、義元の死後自害を考えたことや信長との清洲同盟を堅守したことからも分かるように、従順にその役割に徹していた。このことは、「前田利家が長寿を全うしていれば、家康は豊臣家一の大大名の分限を踏み越えず、野心も露わにせぬままこの世を去ったはず」(加来, 1996; p. 215) といわれているとおり、虎視眈々と機を伺っていたとか不満を抱きながらも耐えていたというよりも、家康のDVにおける縦的な関係を築く傾向の強さによるものと考えられる。また、大樹寺住職の言葉に自害を思い留まりその後の旗印としたとのエピソードからも、縦的関係のなかで受け身的に他者からの影響を受けやすい家康の特性がみてとれる。

・管理主義

天下人となり江戸幕府を開いてからの家康は、必然的に縦的関係における「頼られる」方の役割をより多く担うようになった。しかし、「頼る」から「頼られる」へと役割の比重が変わっても、基本的な関係のあり方は変わっておらず、それは徹底した管理主義という統治方針に現れて

いる。家康は、信長のように権力による支配でもなく、家康のように人柄と報酬によって手懐ける方法でもなく、武家諸法度と禁中并公家諸法度に代表される制度やシステムにより家臣や諸大名はもとより朝廷までを徹底的に管理する封建的社会の構築を目指した。また、家康は秀吉と同じく多くの側室を抱え19人という三武将のなかで最も多くの子どもをもうけたことでも知られるが、秀吉が好みの女性を素生や年齢に関係なく側室に迎えていた、つまり性愛的関係をもつことが目的であったのに対して、家康にとってその条件はあくまでも子どもが産めることであり、そのことからみて家康の子どもの多さは単なる偶然ではなく、頼りになる後継者を多くつくることで世襲制という縦的な関係を強固なものにする意図が無意識的であれあったと考えられる。

・低い自己評価

DVの人における自己評価の低さという特性は、縦的な関係を築くための必要条件でもある。つまり、自己評価の低さ故に、DVの人は、他者に頼らなければならないと感じ、またそのことを正当化することができる。家康の場合、遺訓でも「堪忍」することの重要性を説くなど、謙虚さと禁欲的なライフスタイルに本特性が象徴されていると考えられる。前者については、例えば本来徳川家の本拠地であった岡崎城奪取にあたり、勝ち戦であったにも関わらず城主自ら撤退するのを待っていたことや、武田軍に敗戦した際に慢心への自戒の意を込め描かせたという「しかみ像」などがこれにあたる。そして、後者については、「小身のわしが珍物を好んだりすれば、百害あって一利もない」（故老談話）と言って高価な珍味を勧められてもこれを拒み、質素倹約に徹した地味な生活を生涯続けたことなどがこれに相当すると考えられる。

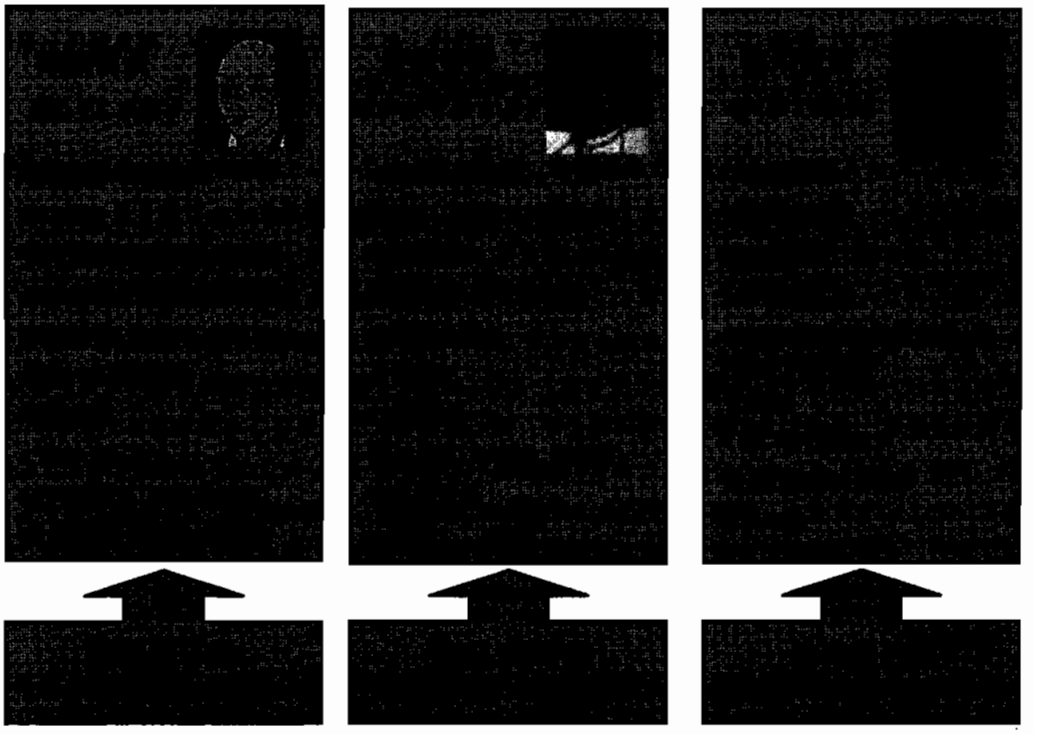

図４．三武将の原子価と、それを特徴づけるキーワード

ホトトギス考に立ち返ってみると、家康にとってほととぎすを鳴かせること、すなわち天下をとるなどということは、独力でどうにかなると考えられるものではなく、それ故辛抱強く、また過剰な期待をすることもなく待ち続けることができたのかも知れない。

おわりに

本稿では、戦国時代を代表する武将である織田信長、豊臣秀吉、徳川家康のそれぞれに際立った個性を表すために用いられるホトトギス考をもとに、それを裏付ける史実や歴史上のエピソードなどを素材として用いることにより、原子価論の観点から考察を行った。その結果、信長にはFV、秀吉にはPV、家康にはDVに相当する素材が多くみられた。このことから、三者はそれぞれ異なるVをもち、それが仕事のやり方や対人関係のあり方に大きな影響を与え、さらにその生涯を終えてからも、後の人々によってそれぞれのVの特性を強化するような史実の解釈や新たな歴史的エピソードの追加がなされながら現在に至っていることが明らかとなった。

本稿で言及できなかったFlVについて、ここで少し触れておきたい。ホトトギス考は、現在でもインターネット等で「あなたなら何を入れるか」といったかたちで取り上げられており、多くの著名人による句も存在する。そのうち、松下幸之助が詠んだといわれる「鳴かぬなら　それもまたよし　ほととぎす」や、織田信長の子孫にあたるフィギアスケート選手の織田信成が報道陣の質問に答えて言った「鳴かぬなら　それでいいじゃん　ホトトギス」などは、対象との距離を保ち葛藤を回避しようとする傾向の強いFlVの特性をよく表していると言えよう。

次に、本稿では三者のパーソナリティ特性に焦点を当てたため深く言及していないが、リーダーシップ論から三者のVについて考えた場合には、個人的特性だけでなく、それぞれのリーダーシップが発揮された当時の社会状況を無視することはできない。Bion（1961）やHafsi（2004）が述べているとおり、リーダーはその時のグループにおける基底的想定グループに相応しいリーダーシップを発揮してくれる人物が選ばれるという意味で、なるものではなくグループによってつくられるものである。つまり、三者はそれぞれの生きた時代の社会というグループによって必要とされつくられたリーダーシップを持ち前のVによって発揮することができたからこそ受け入れられ支持されたと考えられる。ごく簡単に触れるならば、信長の場合、時代は戦国真っ直中、すなわち闘争・逃避基底的想定が支配的であり、率先して敵と戦い勝つことができるFVのリーダーが求められ、それが秀吉の時代になると、戦国時代の終結と共に新しい時代への期待が生まれ、「つがい基底的想定」（basic assumption of pairing）が支配的となり、楽観的志向によって希望的期待を抱かせてくれるPVのリーダーが求められるようになった。さらに家康の時代になると、安定した統一国家の存続を求める「依存基底的想定」（basic assumption of dependency）が支配的となり、民衆の依存を受け入れるようなDVのリーダーが求められるようになったと考えることができる。この点については、今後の研究のなかで取り組み明らかにしていきたい。

最後に、本稿から得られる示唆として、Vとは、我々がその人となりやライフスタイル、リーダーシップなどを語る際の類型の一つになっており、それは時代背景が異なっても共通しているといえる。そう考えるならば、今後も信長・秀吉・家康の三武将は、すべての人間がもつVを代

表する存在として、社会のなかに生き続けるだろう。

注

1）原典は『甲子夜話第4巻』（中村・中野, 1978; p. 58）。なかぬなら殺してしまへ時鳥（織田右府）、鳴かずともなかして見せふ杜鵑（豊太閤）、なかぬなら鳴まで待よ郭公（大権現様）。

2）それまでは農民が兵士を兼務していたため戦が農閑期に限られる、充分な訓練を行うことができないなどの問題があったが、信長はこれを分けることにより、戦闘訓練を受けた常備軍整備を実現した。

3）信長が用いた印章で、武士による統一国家を目指すという意志を表したもの。

4）特権商人が独占していた市の制度や、特定商品の生産、販売の特権を握っていた座を廃し、商人が自由に市に出入りして営業できるようにした制度。これにより城下町の商工業は大いに発展した（NHK取材班編, 1998参照）。

5）非常に短期間に築城したことから、「墨俣一夜城」として知られる。

6）秀吉は、無類の女性好きで知られ、300人もの側室を抱えていたとも言われるが、子どもは3人しか授からなかった（内2人は幼くして亡くなっている）。

7）穢(けが)れた国土を厭(いと)い離れ、永遠に平和な浄土を欣(ねが)い求めそれを成すという意味。源信著「往生要集」が原典。

8）隠居の際家康に「大御所」との敬称が与えられていたことから、「大御所政治」とも呼ばれる。

9）当時、保守的で管理主義的な徳川政権に対する庶民の不満が秀吉待望という形で表面化し、読本（小説）の『絵本太閤記』や双六が一大ブームとなった。

10）出自が貧しく充分な教育を受けることができなかったにも関わらず出世した人を表す際に用いられ、田中角栄などが知られる。

参考文献

Bion,W., 1977, Seven Servants, Jason Aronson, 福本修・平井正三訳, 1999, 精神分析の方法Ⅰ：セブン・サーヴァンツ, 法政大学出版局.

Bion,W., 1961, Experiences in groups and other papers, London: Tavistock. New york: Basic Books, 池田数好訳, 1973, 集団精神療法の基礎, 東京：岩崎学術出版社.

童門冬二, 1997, 戦国「大改革」を断行した覇者たちの統治力, プレジデント, Vol.35, No.10（1997/10), pp. 210-219, プレジデント社.

Hafsi,M., 2004,「愚かさ」の精神分析, ナカニシヤ出版.

Hafsi,M., 2006, The Chemistry of Interpersonal Attraction: Developing further Bion's concept of "valency", 奈良大学紀要, No.34, pp. 87-112, 奈良大学.

Hafsi,M., 2008, The valency theory: the human bond from a new psychoanalytic perspective, 奈良大学紀要, No.36, pp. 105-130, 奈良大学.

原田伴彦, 1982, 人物史夜話（原田伴彦著作集；6), 京都：思文閣出版.

加来耕三, 1991, 歴史組織学：「小さな力」を「大きな力」に変える！, 東京: かんき出版.

加来耕三, 1996, 戦国三英傑に学ぶ人間管理術, 東京：株式会社講談社.

加来耕三, 2006, 講演録：戦国武将に学ぶリーダーの条件, りそなーれ, Vol.4, No.12（2006/12), pp. 30-35, りそな総合研究所.

木村敏, 1988, あいだ, 弘文堂.

松浦静山著, 中村幸彦・中野三敏校訂, 1978, 甲子夜話4, 東京：株式会社平凡社.

武藤誠, 1995, リーダーの器：戦国武将に学ぶ, 東京：啓正社.

小此木啓吾, 1997, 三人の天下人を精神分析する, プレジデント, Vol.35, No.10 (1997/10), pp. 220-229, プレジデント社.

NHK取材班編, 1996, 堂々日本史 2 , 東京：KTC中央出版.

NHK取材班編, 1997, 堂々日本史 6 , 東京：KTC中央出版.

NHK取材班編, 1998, 堂々日本史11, 東京：KTC中央出版.

篠田達明, 2005, 三英傑の健康診断：信長・秀吉・家康の臨床カルテ, 日本病院会雑誌, Vol.52, No.11 (2005/11), pp. 1608-1624, 日本病院会.

白石一郎, 1988, 戦国武将伝：リーダーたちの戦略と決断, 東京：文藝春秋.

Stock, D., & Thelen, H., 1958. Emotional dynamics and group culture. Washington DC: National Training Laboratories.